早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊　21号―1　二〇一三年九月

『太平広記』所収「金牛」「銀牛」故事考

趙　倩倩

はじめに

中国北宋時代に編纂された『太平広記』の巻四百三十四「畜獣一」「牛」には、晋の『湘中記』から引用した「金牛」の話と唐の『酉陽雑俎』から引用した「銀牛」の話が収められている。この二話は多少の異同があるが、相共通する、非常に興味深いモチーフをもつ。すなわち「人が牛とともに山に入って姿を消す」、そして「牛の糞が金や銀などの財宝に化す」というものである。この「金牛」と「銀牛」の話は牛が「金牛」か「銀牛」かの違いはあるが、一類のモチーフを備えると思われる。

本稿では、前述の二つのモチーフに焦点をあて、それぞれのモチーフの源泉と思われる話を辿り、当時の文学風潮や人々の牛に対するイメージと結びつけながら、この「金牛」「銀牛」の話が成立するまでの道のりを検討していきたい。

一、「金牛」・「銀牛」の話

まず、「金牛」（『太平広記』巻四百三十四「牛」所収）と題する話をみてみよう。

長沙西南有金牛岡。漢武帝時、有一田父牽赤牛。告漁人曰、寄渡江。漁人云、船小、豈勝得牛。田父曰、但相容、不重君船。于是人牛俱上。及半江、牛糞於船。田父曰、以此相贈。既渡、漁人怒其汚船。以橈撥糞棄水。欲尽、方覚是金。訝其神異、乃躡之。但見人牛入嶺。随而掘之、莫能及也。今掘処猶存。（長沙の西南に金牛岡有り。漢の武帝の時、一の田父の赤牛を牽く有り。漁人に告げて曰く、「寄りて江を渡らん」と。漁人云く、「船小さければ、豈に牛に勝へ得んや」と。田父曰く、「但だ相ひ容るれば、君の船を重くせず」と。是に于いて人牛俱に上る。江を半ばするに及びて、牛　船に糞す。田父曰く、「此を以て相ひ贈る」と。既に

渡り、漁人其の船を汚すを怒る。橈を以て糞を撥き水に棄つ。尽きんと欲するとき、方めて是れ金なりと覚る。其の神異を訝り、乃ち之を躡ふ。但だ人牛の嶺に入るを見る。随ひて之を掘るに、能く及ぶ莫きなり。今掘る処猶ほ存す。(1)

この話の内容は、以下のようになる。

長沙の西南部に金牛岡という所があった。漢の武帝の世に、一人の田父が赤い牛を引いて漁師に船に乗せてくれと頼んだ。漁師は船が狭いので牛は乗せられないと言ったが、田父が乗せてくれさえすれば船を重くしないと答えた。人と牛が船に乗ったが、流れの半ばに到ると、牛が糞をしてしまい、田父がそれを礼として贈ると言った。対岸に着くと、漁師が船の汚されたことに腹を立て櫂で糞を水中に払い落とした。終わろうとした時に糞が黄金であることにはじめて気付いた。その神異を不思議がり、あわててその行方を目で追うと、田父と牛がすでに山に入り見えなくなった。跡を追いかけてその場所を掘ってみたが見つからなかった。その掘った場所が今まだ残っている。

本文の「嶺に入る」というのは、田父と牛が嶺の中に姿を消すことを意味し、「随ひて之を掘る」は、それを目にした漁師が、更に金や財宝を得ようとその場所を掘り尽くしたことをいう。その欲得ずくの行動は、なお残存する掘り返した跡に象徴される。

なお、本話は『太平広記』のほかに、『方輿勝覧』（宋の祝穆の撰）巻二十三「江水二」にも収録される。『方輿勝覧』所引のものは簡略に記され、内容的な相違もあるので以下に引用しておく。

湘中記載、赤牛渡江、糞金於沙中。舟人跡逐、至山不見。乃掘地求之。掘処尚存、謂之金牛崗。（『湘中記』に載る、「赤牛　江を渡るに、金を沙の中に糞す。舟人跡逐し、山に至りて見ず。乃ち地を掘り之を求む。掘る処尚ほ存す。之を金牛崗と謂ふ」と。）

『太平広記』所引のものと比較すると、田父が登場していないこと、赤牛が金糞をしたのは船の中ではなく、砂の中であったなどの差異がある。誤写あるいは改変などの可能性を含めて、一つの異伝としての意味をもつ。

さて、「銀牛」と題する話を見てみよう。同じく『太平広記』巻四百三十四「畜獣一」「牛」に唐の段成式の『酉陽雑俎』を引いていう。

太原県北有銀牛山。漢建武二十四年、有一人騎白牛蹊人田。父訶詰之。乃曰、吾北海使。將看天子登封。遂乗牛上山。田父尋至山上。惟見牛跡。遺糞皆銀也。明年世祖封禅焉。（太原県の北に銀牛山有り。漢の建武二十四年、一人有りて、白牛に騎り人の田を蹊る。父　之れを訶詰す。乃ち曰く、「吾　北海の使なり。將に天子の登封を看んとす」と。遂に牛に乗り山に上る。田父尋いで山上に至れば、唯だ牛の跡を見るのみ。遺る糞　皆銀なり。明年世祖　封禅す。(2)

話の筋を簡略に記すと、太原県の北に銀牛山という山がある。漢の建武二十四年にある人が白牛に乗って人の耕作地を踏み荒らした。農夫がそれを叱って問いただすと、「わしは北海の使者だ。天子の登封を見にゆくのだ」と言って、牛に乗ったまま山に登っていった。農夫があとをたずねて山の上に着くと、牛の足跡だけがあった。その牛の残した糞は全部銀であった。翌年、世祖（後漢の光武帝劉秀）が封禅をした。(3)

「金牛」と「銀牛」の話を表にまとめて比べてみると、

金　牛	銀　牛
①一人の田父が赤い牛を引いて江を渡ろうと漁師の船に乗った。その牛が船の中で糞をした。 ②漁師が牛の糞を船の中から払い落し、糞が金に化したことに気づく。漁師が田父と牛に従って山に至る。 ③田父と牛が山の奥に姿を消した。漁師が更に財宝を得ようとその場所を掘ったが、見つからなかった。その掘った跡が今まだ残っている。	①ある人が白牛に乗って人の耕作地を踏み荒らした。 ②農夫がそれを叱ると、自分は北海の神の使者であり、天子の登封を見にゆくと言った。 ③人が白牛に乗ったまま山に登っていき姿を消した。農夫があとをたずねて山に至ると、牛の足跡だけが残っていた。その白牛の糞は全部銀であった。

「金牛」には田夫が出てくるのに対して、「銀牛」の話には神使が登場してくる、船に乗るシーンが畑を踏み荒らすシーンになる。「金牛」の話が東晋の地理書である『湘中記』(4)に記され、「銀牛」の話が怪事異聞を百科全書的に記した『酉陽雑俎』に出てくるといった相違があるが、しかし、田父にしても神使にしても牛とともに山の中に姿を消したことや、牛の糞が金や銀に化したことが共通している。このことから「金牛」と「銀牛」の二話が類型的な話形をもつと考えられる。

牛は最も早く家畜化された動物の一つとして、人間と共に長い歴史を歩んできた。特に農耕の面において重要な動力として使用されて、人間にとっては身近な存在であった。しかし、「金牛」に現れる田父が牛を引いて山の中で姿を消したのは先行する話と何らかの関連をもつであろうか。更に牛が金や銀の糞をするという不思議な出来事はどのように発想されたのだろうか。

まず、「人が牛とともに山に入って姿を消す」というモチーフについて考察しよう。

二、老子が牛に乗る伝承

田父や神の使者が牛とともに山の中で姿を消してしまうという話から想起されるのは、古く老子が青牛とともに関を出る話である。管見の限りでは、この老子のものが最も古いもので、人が牛とともに姿を消す中国の伝承の中において源泉的な意味を持つものと考えられる。

老子は春秋戦国時代に生きた道教の創始者とされる人物である。『史記』によると、老子は楚国苦県曲仁里（今の河南省東部の鹿邑県）に生まれて、姓は李、名は耳、字は聃である。東周に仕えて守蔵室の史をつとめていた。その結末に関しては、長生きであったとか、青い牛に乗って西の方に向かったとか、仙山である崑崙山に登ったとかの

神秘的な相承が数多く存在する。

それでは、『史記』から見てみよう。『史記』巻六十三「老子韓非列傳」第三に、次のように書かれている。

居周久之、見周之衰、迺遂去。至関、（後略）（周に居ること之れを久しうし、周の衰ふるを見、迺ち遂に去る。関に至りて[5]）。

周の守藏室[6]（王室の記録保管室）の史官であった老子は、周王室の衰えてゆくのを目にして、遂に都を去り函谷関[7]に至ったという。

更には、その際『列仙伝』巻上「老子」には

後　周徳衰、乃乗青牛車去、入大秦、過西関。関令尹喜待而迎之、知真人也、乃強使著書作道徳経上下両巻（後ちに周の徳衰へ、乃ち青牛の車に乗って去り、大秦に入り、西関を過ぐ[8]。）

とある。この「大秦」は一説にはローマ帝国のことであるという。周王朝の権威が衰えたので、老子が青牛に引かせた車に乗って周を去り、大秦国に入ろうと、西関を通りかかった。「牛車」に乗って西のほうに出たことがはじめて書かれた。

また、『太平御覧』巻九〇〇「獣部一二」「牛下」には『関中記』より次のように引用する。

周元年　老子之度関、令尹喜先勅門吏曰、若有老公従東来乗青牛薄板車者、勿聴過関。其日果見老公乗青牛車求度関。（令の尹喜先づ門吏に勅めて曰く、「若し老公の東より来り青牛の薄板車に乗る者有らば、関を過ぐるを聴す勿れ」と。其の日果たして老公の青牛の車に乗り関を渡らんとするを見る[9]。）

函谷関の令である尹喜が、青牛の車に乗って関を渡ろうとする老人を見かけたら止めるようにと部下に命令した。すると、果たして老子が現れたことが書かれている。「関中」という呼び名は戦国時代よりはじまり、広義では函谷関の西の地域を指すが、狭義では、現在陝西省渭川流域のみを指す。老人が青牛の車に乗って関を通った話が、少なくても陝西省周辺で伝えられていたことが窺える。

『神仙伝』巻一には、

老子将去、西出関、以昇崑崙。（老子将に去りて、西のかた関を出で、以て崑崙に昇らんとす[10]。）

とある。これによると、老子はいよいよ周の国を去り、西の方向へ関を出て崑崙の山に登ろうとした。崑崙山は中国古代に西方にあると考えられていた伝説の山であり、地上と天上世界を結ぶ階梯であるとされて、この山を登りきると天帝の居所に至るとされている。

『太平御覧』巻六百六十一「道部三」は「三一経」を引用し、下記

のようにある。

及老子渡関、喜誡関吏曰、若有翁乗青牛薄板車者、勿聴過。（喜関吏を誡めて曰く、「若し翁の青牛の薄板車に乗る者有らば、過ぐるを聴す勿れ」[11]と。）

『関中記』とほぼ同じ内容である。

上述の文献に出てきた老子の行方について、文献の成立時代順にまとめてみる。

漢	漢	晋	晋	不明
『史記』	『列仙伝』	『関中記』	『神仙伝』	『三一経』
関に至ったと記され、牛に乗る記載がない。	青牛の車に乗って去り、大秦に入ろうとし、西関を通った。	老子が青牛の車に乗って関を通った。	老子が西の方向へ関を出て崑崙の山に登ろうとした。	青牛の薄板車に乗って、関を寄りかかった。

『史記』には西の方へ向って関を出たことが書かれたが、牛或いは牛車に乗る記載は一切なかった。『列仙伝』になると、老子は青牛の車に乗って関を後にしたという内容がはじめて書かれた。『関中記』と『三一経』には同じく「青牛の薄板車に乗って関を出づ」とあり、『神仙伝』には、「崑崙に昇らんとす」とある。崑崙は西王母が住むと伝えられた西域の仙山であり、老子を神仙化しようとする作者の意図が窺える。

老子の神格化は漢の時代からはじまり、老子の上には、早くからさまざまな神秘的な伝説が付会されて、そこにいわば道教的老子像が形成されたと考えられる。黙々と働き、愚鈍なイメージを与える牛は、聖人老子の乗り物になることによって、人を仙人世界に導く霊性をそなえた存在になった。

ところで、老子の時代にはすでに牛車に乗ったり馬に乗ったりして遠くに出ることが普通のことであったが、なぜ老子の乗り物に馬ではなくて牛が選ばれたのだろうか。

このことについて、彭永捷氏は論文「龍、鳳、青牛と老子」[12]の中でこう述べている。「牛は性質が温和かつ柔順服従の動物である。しかも恥を忍んで重責を担い、堅忍不抜の特徴を持っている。『易伝』には、「天行健。君子以自彊不息。」（天行は健なり。君子以って自ら彊めて息まず）、「地勢坤。君子以厚徳載物。」（地勢は坤なり。君子以って徳を厚くし物を載す）という。（中略）漢の時代の人は馬を以って「天行健、君子以自彊不息」の精神を喩え、牛を以って「地勢坤、君子以厚徳載物」の精神を表した」と。

牛をもってする「地勢坤、君子以厚徳載物」の精神は老子の清静無為の主張に相応しい。老子が青牛に乗っていることは東方の文明地域より来る文化使者がその柔順を尊ぶ知恵を持って未開化の西方へと隠遁することを象徴したといえる。

老子以外で、牛に乗る仙人として登場する人物の記録も見える。『芸文類聚』巻第九十四「牛」には、袁山松の『宜都山川記』を引用し、

以下のような話を記していう。

自峡口泝江百許里、至黄牛灘南岸有重山、山頂上有石壁。上有人負刀牽黄牛、人迹所絶、莫得究焉。（峡口自り江を泝ること百里許り、黄牛灘の南岸に至るに重山有り、山頂の上に石壁有り。上に人の刀を負ひ黄牛を牽く有り、人迹の絶ゆる所にして、究むるを得ること莫し。）[13]

『宜都山川記』は、書名の通り宜都の山川に関する地理書であり、袁山松が東晋の時代に撰した。話の概略を記すと、峡口から川を百里ほど遡り、黄牛灘南岸にいたるまでに山々が幾重にも連なる。その山の頂にある石壁に、刀を持ち、黄牛を引く人が見える。険峻で人跡の稀な山であるため、それを確かめることができない。

『芸文類聚』以外に、『水経注』にも『宜都山川記』を引き、少し異なる内容が見える。

江水又東経黄牛山、下有灘、名曰黄牛灘、南岸重嶺畳起、最外高崖間有石、色如人負刀牽牛。人黒牛黄、成就分明。既人跡所絶、莫得究焉。（江水又東のかた黄牛山を経て、下に灘有り。名づけて黄牛灘と曰ふ。南岸　重嶺畳起して、最も外の高崖の間に石有り、色は人の刀を負ひて牛を牽くが如し。人は黒く牛は黄く、成就分明す。既に人跡の絶ゆる所にして、究むるを得ること莫し。）

二つの記載を照らし合わせてみると、「人の刀を負ひて牛を牽く」というのはその石壁、あるいは石の形状をいうことがわかる。

このような牛を引く人が山にいるということは偶然な行為ではないと思われる。「山」というのは道教を信じる人にとって特別な意味がある。「仙山」という言葉があるが、仙人のいる場所とされて、仙人になるには、山での修行が必要になる。人跡の稀な山の中で隠者や道士が山の中で修行することを連想させることから、これらの話は老子が青牛に乗って関を出る話と何か関係があるのではないかと思われる。

更に興味深いのは、老子や仙人が牛に乗って山の奥で姿を消すという記載が、道教の経典から地方の山川や風土を記す地理書である『関中記』や『宜都山川記』の中に出てくるということである。これらの地理書が生まれた六朝時代というのは地理書の非常に盛んな時期であった。当時は戦乱がつづき、社会が不安定な時代であったために、中央の権力が分散し、儒教の中心的な地位が崩れて、仏教や道教も広く信じられていた。人々は妖怪や動物などの怪奇な行動に関心を持ち、好んで語り続けた。老子や仙人が牛に乗る話が神仙の伝記類のみならず、地理書の『関中記』や『宜都山川記』にも記されたということは、知識人が地理書を編集する際にその道教的知識を、巧みに入れこんだと思われる。

前述の第一章を振り返ると、「金牛」の田父が牛とともに山の中で姿を消したというのは、この話の伝承者が「田父」を仙人、あるいは

山の中で修行する方術の高い道士だと認め、その乗り物の牛も金糞をする霊性を備える存在であると理解していたと考えられる。「銀牛」の話では、山の頂上で姿がなくなったことも、白牛が銀糞をすることもその神使である身分に基づくだろう。「金牛」にしても、「銀牛」にしても、老子が青牛に乗って関を出た伝説より後の時代に見え、老子の伝説は「人が牛とともに山に入って姿を消す」モチーフの先蹤となる。「金牛」や「銀牛」の話は、老子の話から示唆を得て発想されたものに違いないだろう。

三、財宝をもたらす牛

次は「牛の糞が金や銀に化す」というモチーフについて検討していきたい。

後漢の応劭が著した『風俗通義』に、「牛乃ち農耕の本なり、百姓仰ぐ所なり」[14]とあるように、牛は農耕の根本であり、人々が非常に頼りにしていた存在であった。更に、『詩経』「小雅」「信南山」の中に「祭るに清酒を以ってし、従ふるに騂牡[15]を以ってし」とあるように、神を祭り、豊作を祈る際の犠牲でもあった。耕作時には動力としての働き、そして豊作を祈る時には生贄としての存在、いずれも豊穣へとつながるプラスイメージを与える。しかし、牛が財宝をもたらすというイメージは、どのように発生したのであろうか。

牛が財宝をもたらすことについては、澤田瑞穂氏の『金牛の鎖―中国財宝譚―』[16]において、金牛に繋がっている金鎖を得ることによって金持ちになる話[17]や、糞拾いの老人が山の中で牛の尻から金の糞を拾うような話などのいわゆる致富型財宝譚の話をいくつか抄出し紹介している[18]。牛が財宝を齎す伝承の発生に関しては、澤田氏は前掲書の中で、「それらは山の形が臥した牛を連想させることから命名されたであろうが、同時に山の神霊が牛と考え、また山の宝の精でもあるゆえに金の牛としたのである」と論じたが、しかし、牛が豊穣のイメージを与えるとはいえ、牛の糞が金に化すモチーフに至る所以は必ずなんらかの故事によるだろう。それを文献に求めてみると、前漢の揚雄が著した『蜀王本紀』に牛が金の糞をする次の話が見える[19]。

『蜀王本紀』は現在逸書となり、『芸文類聚』巻九十四と『太平御覧』巻九百「牛」下に佚文をみることができる[20]。多少字句の異なる記載があるが、ここでは『芸文類聚』より抜粋しておく。

秦恵王欲伐蜀。乃刻五石牛、置金其後。蜀人見之、以為能大便金。牛下有養卒、以為此天牛也、能便金。蜀王以為然。即発卒千人、使五丁力士拖牛成道。致三枚於成都。秦得道通、石牛力也。後遣丞相張儀等隨石牛道伐蜀（秦の恵王　蜀を伐たんと欲す。乃ち五の石牛を刻み、金を其の後に置く。蜀人之を見て、以為へらく能く金を大便すと。牛下に養卒有り、以為へらく此れ天牛なり、能く金を便すと。蜀王以て然りと為す。即ち卒千人を発はし、五丁の力士をして牛を拖きて道を成さしむ。三枚を成都に致す。秦道の通づるを得るは石牛の力なり。後　丞相張儀等をして石牛の

道に隨ひ蜀を伐たしむ。[21])

この話の内容を記すと、秦王は蜀を討伐しようとし、五頭の石牛を作り、金をその後ろに置いた。蜀の人はこれをみると、牛が金を排便するのだと思った。蜀王もそう信じて、千人の士卒と五人の力士を遣わして、五頭の石牛を蜀に引き入れようとした。そして、その中の三頭を成都に置いた。李白が詩句「蜀道之難、難於上青天」（蜀道の難きこと、青天に上るよりも難し）で詠じたように蜀への道のりは非常に峻険であった。しかし、この石牛を引いて通じた道に従うことによって、秦の丞相の張儀等は兵を率いて蜀を攻めた。

『蜀王本紀』は歴代の蜀王の伝記であり、貪欲であったために国を失ってしまうという教訓的な意味が含まれるだろうが、より露骨に蜀王の貪婪を書いた話が後漢の桓譚の『新論』の佚文に見える。清の『春秋戦国異辞』の所引の次の記事である。

蜀侯性貪。秦惠王聞而欲伐之。山澗峻嶮、兵路不通。乃琢石為牛、多與金置牛後、號牛糞之金、以遺蜀侯。蜀侯貪之、乃塹山填谷、使五丁力士以迎石牛。秦人帥師隨後。而至滅国亡身。（蜀侯　性は貪なり。秦の惠王聞きて之を伐たんと欲す。山澗　峻嶮にして兵路通ぜず。乃ち石を琢（みが）き牛と為し、多く金を與へて牛の後ろに置かしめ、牛糞の金と號し、以って蜀侯に遺せば、蜀侯　之を貪（むさぼ）り、乃ち山を塹（ほ）り谷を填（うづめ）めて、五丁の力士をして以って石牛を迎へしむ。秦人　師を帥ゐ後に隨ふ。而して国を滅ぼし身を亡ぼすに至る。[22])

この蜀王が貪婪によって「滅国亡身」を致した話が前漢の『蜀王本紀』に記録され、後漢の『新論』にもまた記される。恐らく貪婪な君王を風刺するという趣旨で書かれたものだが、その中の「牛が金の糞を排便する」モチーフが人々の話の種となり広く伝えられていたであろう。この蜀王の話はいわゆる牛が金糞をするモチーフのはじまりではないかと思われる。第一章に述べた「金牛」・「銀牛」の牛が金糞・銀糞をするモチーフもこの話を源泉とするものだろう。

前述のように、六朝というのは怪奇を記す風潮の盛んであった時代であるので、地理書もその風潮の影響下にあった。その書き手である知識人たちは身近な山々の山容から連想を豊富にひろげ、「仙人」、仙人の乗り物である「牛」、「金糞」をする「牛」などの要素を巧みに織り込んで「金牛」という話譚を紡ぎ出して成立したのであろう。

「金牛」、「銀牛」の色について少し考えてみよう。「金牛」の話に登場する牛が「赤牛」であるために、残した糞が金になり、「銀牛」の話に登場する牛が白牛であるために、その糞が金ではなく、銀になるのは、牛の毛色による連想と関わろう。また、なぜ神の使者が白牛になるのかということを考えると、恐らく白牛がよく生贄として奉げられることから発想されたことが推測でされる。晋の王嘉が著した『拾遺記』「昆吾山」に「越王勾践使工人以白馬、白牛、祀昆吾之神」（越

王勾践　工人をして白馬、白牛を以って、昆吾の神を祀らしむ）とあるように、白馬、白牛が神への生贄として奉げられたことが見える。「銀牛」の話において、北海の神使はその神使の身分を持つゆえに神への生贄とされる白牛に乗るものと理解される。「銀牛」の話は六朝の後の唐代に生まれることから、時代を先行する「金牛」の話から示唆を得て発想されたのではないかと推測できる。

終わりに

以上「金牛」・「銀牛」に現れた「人が牛とともに山に入って姿を消す」と「牛の糞が金や銀などの財宝に化す」という二つのモチーフをめぐり、それぞれの源泉と思われる話を探り、「金牛」・「銀牛」の話型にいたるまでの道のりを考えてきた。

老子が青牛に乗って関を後にした相承が、時代を経るにつれて潤色改変されて、老子は不老不死の仙人として神格化された。平凡な存在であった牛は伝承の中で聖人老子の乗り物として確かな位置をもったことによって、人々を仙人への道に導く霊性をそなえる存在になった。老子が牛に乗って函谷関を後にしたという伝承が『列仙伝』などの道教の経典に記載され、また『関中記』などの地理書にも採録されたということから、老子伝説が広く人々に伝えられ浸透していたことが知られる。

『蜀王本紀』や『新論』所収の記事は、貪婪によって「滅国亡身」した蜀王を風刺する意図で書かれたが、故事の中の牛が金の糞を排便するモチーフが、人々に興味を持たれて、蜀の国（今の四川省地域）や秦の国（今の陝西省周辺）に広く知られていたとも思われる。

周知のように、戦乱がつづき社会的不安定であった六朝時代には、怪異を志す風潮が高まり、当時の地理書もその風潮に染められ、山川や風土を記す際に奇想天外な故事を多く記載する傾向が窺える。地理書の書き手である知識人がその身辺の山川を描写する時にその知識の基盤下にある道教的な神霊に関わる要素を取り入れる可能性が少なくないと思われる。

地理書の『湘中記』に収載される「金牛」の話は、神仙説話と致富型財宝譚という二つのモチーフを持っている。老子や仙人が牛とともに姿を消すモチーフを吸収し、その地域に伝わる牛が金の糞を排便するモチーフを撮合して新たに作られたと考えられるが、それは仙人に関する伝説の変奏もしくは敷衍と見なすことができる。「銀牛」の話は、普通の人間ではなく、神の使者が直接登場してくるが、「金牛」と類似するモチーフを持ち、そして「金牛」の話ができた後の時代に見られる。「金牛」の話からにインスピレーションを得て発想されたもので、かくてバリエーションのある話容が誕生したものと考えられる。

注（1）　人民文学出版社一九五九年刊の『太平広記』を参照し訓読。

（2）　『酉陽雑俎』の記載には『太平広記』と多少異なる字句がある。明の毛晋校注の『酉陽雑俎』（『津逮秘書』本）に依り、以下に引用する。

訓読は、『和刻本漢籍随筆集』（古典研究会、一九七三年）第六集に収められた『酉陽雑俎』に附した訓点を参照したが、私意により改めたところもある。

太原県北有銀牛山。漢建武二十一年、有人騎白牛蹊人田。田父訶詰之。乃曰、吾北海使、將看天子登封。遂乗牛上山。田父尋至山上。唯見牛跡。遺糞皆為銀也。明年世祖封禅。（太原県の北に銀牛山有り。漢建武二十四年に人有り、白牛に騎り人の田を蹊る。父　之れを訶詰す。乃ち曰く、「吾　北海の使なり、將に天子の登封を看んとす」と。遂に牛に乗り山に上る。田父尋いで山上に至れば、唯だ牛の跡を見るのみ。遺す糞　皆銀と為るなり。明年　世祖　封禅す。

（3）訳文は東洋文庫三九七、今村与志雄訳注『酉陽雑俎』を参照。

（4）地誌・地記ともいう。ある地域について国土・山川・古跡・風俗・物産などを記す書物である。

（5）中華書局一九八二年発行する『史記』を参照し訓読。字体は原則として参考図書に準じて作った。以後の項目もこれと同じである。

（6）『史記』「老子韓非列伝」第三によれば、老子は「周守蔵室之史也」（周の守蔵室の史なり）とある。

（7）この「関」というのは中華書局一九八二年に発行する『史記』の注によると、散関或いは函谷関を指す。散関は今の陝西省宝鶏市に位置し、函谷関は今の河南省霊宝市北にある。いずれにしても、河南省から西のほうへ向かったことが分かる。

（8）商務印書館一九三六年発行する『列仙伝』を参照し訓読。

（9）テキストは中華書局一九八〇年刊行の『太平御覧』を参照。

（10）福井康順、明徳出版社、一九八三年。

（11）テキストは中華書局一九八〇年刊の『太平御覧』を参照。

（12）『中華文化論壇』一九九七年第二期。筆者が中国語を日本語に訳し引用。

（13）中華書局一九六五年に刊行する『芸文類聚』を使用。

（14）『太平御覧』巻八百七十三休徴部が『風俗通義』を引いて「牛乃農耕之本、百姓所仰、為用最大、国家之為強弱也」とある。

（15）「騂牡」は赤い雄の牛をいう。

（16）平凡社選書・八三、一九八三年。

（17）その一例を『金牛の鎖―中国財宝譚―』より引用しておく。
儲潭（ちょたん）は東晋の咸和二年に刺史の朱偉がつくった。漁夫がこの潭で釣りをして、金の鎖を得た。数百丈も船に引き上げると、突如一物が鎖に伴ってあらわれた。その形は水牛のごとく、眼が赤く角が白い。人影を見て驚き、鎖を曳いて逃げる。漁夫は刀で数尺を得た。（『漢唐地理書鈔』引顧野王『輿地志』）

（18）澤田氏は、「山の金牛には金の糞を得る話があり、水中の金牛には金の鎖の話が附いている」と指摘している。本稿では、「金牛」「銀牛」話譚に出てくる牛の糞が金や銀に化したというモチーフを中心に見ていくために金鎖の話には今回は触れないことにする。

（19）南方熊楠氏『十二支考』・「馬に関する民俗と伝説」に『大清一統志』巻二百二十二から『金牛』の話を抄出し、更に同書の二百四十巻にこの「蜀王」の話を紹介したが、二者の初出や先後関係については論じていない。更に、金関丈夫氏『木馬と石牛―民族学の周辺』「木馬と石牛」は、蜀王の説話と「トロヤの木馬」説話との類似性を指摘した。本稿の主旨は、蜀王説話の形成にあるわけではないため、ここでは紹介にとどめる。

（20）『太平御覧』のテキストは左記のようである。
秦恵王欲伐蜀。乃刻五石牛、置金其後。蜀人見之以為牛能大便金。蜀王以為然。即発卒千人使五丁力士拖牛成道、致三枚於成都。秦道得石牛力也。後遣丞相張儀等隨石牛道伐蜀也（秦恵王　蜀を伐たんと欲す。乃ち五の石牛を刻み、金を其の後に置く。蜀人之を見て、以為へらく牛能く金を大便すと。蜀王以て然りと為す。即ち卒千人を発（つか）はし、五丁の力士をして牛を拖（ひ）きて道と成さしめ、三枚を成都に致す。秦道は石牛の力を得るなり。後　丞相張儀等をして石牛の道に隨ひ蜀を伐たしむるなり。）

（21）中華書局一九六五年に刊行する『芸文類聚』による。

（22）『文淵閣四庫全書』に所収の『春秋戦国異辞』による。